

《巻頭言》

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学政経資料センター 公開日: 2011-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 白石, 四郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/10358

白 石 四 郎

中野渡信行先生が先頃逝去された。相当の御年ではあったが、長寿国日本の平均余命からすれば未だ未だ御活躍が期待されていたのに余りにも突然の御逝去で驚き悲しんでいる。昨年、蒲生先生の時も未だ50代前半なので全く惜しまれたのであるが、続けての御葬儀に政経学部の教員として嘆いている。まるで戦場であって隣りにいる戦友がバタバタ倒れて行くような感じさえする。この巻頭言を依頼されるようになることは或程度の経験をつんだ者ということになろうが、一番身に染みて感ずることは良く知っている方々が亡くなられてゆく果敢なさである。しかし、世の無常さを嘆いてばかりいても資料センターの巻頭言にはならないから、今後共希望に満ちた気力溢れる人々に励ましの言葉を申上げるのが本当であろう。ところが現状はどこを見ても余り明るいニュースはない。世界は政治的にも経済的にも希望に溢れるものとは言えない。戦争や騒乱は妙な処で生じている。平和運動は直接この様な処に働きかけなければならぬだろう。石油価格が上昇すれば得をするものも損をするものも両方ある筈であった。イランとイラクは共に産油国である。一体両国の国民は石油価格上昇の結果どれ程の影響を受けたであろう。非産油途上国の国民生活が良くなる筈はない。OECD 諸国は軒並みトリレンマとやらに苦しみ、社会主義諸国はポーランドやルーマニアを始め生産力の不足や借金に苦しんでいる。中国も改革に一所懸命である。要するに全部が良くないのである。一度歯車が狂い出すと全体に波及するのである。このような事態に即効薬などある筈はない。一番目新しいフランスのミッテランの政策も効果の程は全然疑問である。再生を期したサッチャーもレーガンも共にその政策は短期的成果のあることを期待してはいけないものである。そもそも生産力などは長期的視点で考えるべきものなのだ。われわれも長期的に努力の積重ねが必要なのである。